

8. 脚長不等症に対する 8-plate® を用いた骨端軟骨発育抑制術の治療経験

浅井 伸治, 富沢 仙一

(群馬県立小児医療センター 整形外科)

【目的】 脚長不等症に対し等長化を目的として骨端線成長抑制術, 骨延長術が行われている. 当科で 8-plate® を用いた骨端軟骨発育抑制術の治療経験を報告する. 【対象・方法】 当科にて 8-plate® を用いた骨端軟骨発育抑制術を 7 例に行った. そのうち, 1 年以上経過した例は 3 例であり, 手術年齢は 4 歳 11 ヶ月～8 歳 11 ヶ月であった. 両側成長軟骨に 8-plate® を用いたもの 1 例, 脛骨側に staple を用いたものが 2 例であった. 【結果】 staple は 2 例とも脱転し後に除去した. 両側 8-plate® 例は術後 1 年にて脚長差が 0 cm となった. Staple を除去した 2 例は大腿骨のみ 8-plate® で抑制され, 術後 1 年 6 ヶ月で脚長差が 0.7～1.6 cm 残存している. 【考察】 脚長不等症において骨延長は大きな延長量が得られるが手術侵襲が大きいこと, 骨長の大きいほうが有利である等の特徴がある. 骨端線成長抑制術の手術侵襲は小さいが効果は限定的であり, 手術も成長余力のある時期に限定される. グリーンは, 大腿骨遠位成長軟骨は 6 mm/半年, 脛骨遠位成長軟骨は 5 mm/半年で成長すると概算している. 両側を 8-plate® にて固定した例では 1 年半で 2.5 cm の脚長補正が得られた.

〈主題 II〉 骨折: 内固定材料に悩んだ症例

座長: 大澤 敏久 (高崎総合医療センター 整形外科)

9. 軟部組織欠損及び骨欠損を伴う下腿両骨遠位端開放骨折に対し, 骨短縮及び後方 Plate 固定を行った 1 例

永野 賢一, 角田 和彦, 岡田 純幸

勝見 賢 (深谷赤十字病院 整形外科)

【症例】 66 歳, 男性. 歩行中に乗用車に衝突されて受傷.

右下腿両骨遠位端開放骨折 AO: 43-C3 Gustilo IIIA を認めた. 【経過】 同日緊急で創外固定術施行し軟部組織の安静を図るも, 経時的に状態が悪化. 重度の粉碎骨折に加え同部に広範囲の軟部組織壊死を伴ったため, やむを得ず第 42 病日に骨短縮術 (約 5 cm) 施行. 同時に後方 Plate 固定を行った. その後皮膚欠損に対し二度植皮術施行. 移植皮膚生着後, 内固定術後 3 ヶ月より LIPUS 開始し, 術後約 4 ヶ月で PTB 器具下 1/3PWB を開始している. 【考察】 足関節後方 approach は一般的ではなく適応は限られるが, 下腿遠位部開放骨折などで軟部組織の状態が不良な場合には一つの選択肢となり得る. 後方 Plate 固定には Distal Medial Tibia Plate を左右逆にして使用すると, 比較的 fitting がよい.

10. 大腿骨頸部骨折 骨接合術後に大腿骨転子下骨折を起こした 1 例

須藤 貴仁, 柳澤 公明, 福田 和彦

(原町赤十字病院 整形外科)

81 歳女性, 2014/12/1 特に誘因なく左股関節痛が出現. 様子を見ていたが改善せず, 12/3 疼痛のため歩行不能となり, 車いすで当院受診. 来院時左股関節周囲に圧痛認め, Xp では明らかな骨傷は認めなかったが, MRI にて左大腿骨頸部骨折と診断された. 12/9 ピンニング (MDM 社 プリマヒップスクリュー×3) を施行した. 術翌日より起立練習を開始し, 経過は良好で, 2015/1/13 退院となった.

1/21 ストープのやかんを置きに行こうとした際に転倒し, 左大腿部痛が出現し, 救急車で来院. Xp にて左大腿骨転子下骨折と診断. 1/26 スクリュー抜去後, 骨セメント注入し, SYNTHES PFNA による内固定を行った. 術後 1 週から部分荷重を開始し, 現在歩行は良好である. 大腿骨頸部骨折の骨接合術後の転子下骨折について, 若干の文献的考察を加えて報告する.